

英国 Plymouth University および周産期施設における研修の報告

アンガホッフア司寿子

A Report of Experiences at Plymouth University and Perinatal Care Facilities in England

Shizuko Angerhofer

キーワード：助産学教育，周産期ケア施設，英国

Key words : midwifery education, perinatal care facility, England

はじめに

Plymouthは英国南西部に位置する人口約25万人の港町で、Londonからは鉄道で約3時間半の距離にある。Plymouth Universityとの交流は、1998年の本学教員によるPlymouth Universityおよび周産期施設の視察から始まり、2009年にはPlymouth Universityの教員2名が本学に来学し、英国の助産学教育についての講義や、県内外の周産期施設の視察など、助産学教育を軸にした交流がはかられている。これらの交流が基盤となり、2012年には学部間の国際交流協定が締結された。

協定締結後初となる今回の研修にあたり、今後の大学間の交流の方向性を探索するねらいもふまえ、研修生の目標、および受け入れ先であるPlymouth University側のアウトカムを明確にし、それらを事前に共有したうえでの渡英となった。先方からは、今回の研修は「visitor（訪問者）ではなく、colleague（仲間・同僚）として受け入れる」という提案もあり、実際の研修も今後の共同研究への発展が意識された内容であった。本稿では、Plymouth Universityの学内外における、助産学教育に関連した内容を中心とした研修での経験から得られた学びを報告する。

I. Plymouth Universityの教育の背景

英国の大学進学には、義務教育終了後に選択

科目を履修してAレベルと呼ばれる統一試験を受験する必要がある。大学の合否はそのAレベル試験の成績によって決定される。英国の大学の学部教育（学士課程）の年数は3年のところが多いが、Aレベル試験に向けた大学入学前の学習期間で学問分野に沿った専門的な内容が含まれている。また、英国の大学は国の基金機関から資金の提供を受けており、授業料は各大学の設定による。英国の大学は、日米の大学のように国公立・私立という言い方で区別をしていないことから大学教育システムの違いを感じた。伝統と歴史を備える大学に加え、1992年の継続・高等教育法によって学芸・技術系学問を専門に学ぶ高等教育機関（Polytechnic）38校が大学に改組され、Plymouth Universityもその新たに仲間入りした大学のひとつである。

Plymouth Universityには、3万人もの学生が籍を置き学んでいる。広大なキャンパスは、歴史が刻まれた建物からモダンな造りの高層建築物までバラエティに溢れ、Plymouthの中心地に位置し、Plymouth駅にほぼ隣接している。大学は、建築学、芸術、コンピュータ、教育学、理工学、法学、医学、心理学、社会学、言語学、海洋学など多様にわたる専門領域の学部を有する。そのなかで、看護学・助産学のプログラムは「Health and Human Sciences」学部 に属する。看護学課程は、さらに「成人看護学」「小児看護学」「精神看護学」に分野が分かれ、

日本の看護学課程のようにすべての分野/領域をくまなく学ぶ形とは異なり、学生がいずれかの分野を選んで入学してくる形となっている。

Plymouth Universityは、Devon州、Cornwall州、そしてSomersetshire州を含む、サイズとしては岩手県よりやや大きなエリアで唯一の看護師・助産師の養成大学である。また、教育施設、実習施設もPlymouth近郊のみならず、南西部広域に渡って提携がされている。よって看護学・助産学を学ぶ学生の出身地も南西部を中心にさまざまな地域で、出身地に近い臨地実習の場所を選び、大学には講義のために鉄道で通う学生も多かった。

助産学課程および看護学課程は、英国の看護師助産師保健師法に則り、看護・助産審議会(NMC)により教育基準が管理されている。どちらの課程も登録前教育の位置づけとなっており、免許取得の国家試験はなく、修了とともに助産師・看護師として登録する資格を得る。さらに助産学課程においては、ダイレクト・エントリー・プログラムと呼ばれる看護師教育を必

須としない3年のコースが存在する。助産学課程在学学生には、英国の国民保険サービスであるNHS (National Health Service) の学資資金があり、社会人学生が多数存在する現状であった。

II. 研修内容の概要

1. 研修期間および研修場所

研修の期間は、平成26年2月24日から3月10日までの15日間であった。内容は、Plymouth Universityを拠点とし、助産学課程のDoris 准教授/助産師スーパーバイザーのコーディネイトの下、大学の講義や演習への参加、および大学と連携する医療機関の訪問が主な内容であった。Doris先生は、助産学課程教員チームのトップとして大学の学生教育に携わる傍ら、助産師の免許更新に係るスーパーバイズも担当しており、大学内にとどまらず臨床現場においても広いネットワークを持っていた。研修の具体的な日程と内容については表に示す(表1)。

研修生としての研修の目標は以下のとおり

表1 研修プログラム

日 程	研 修 内 容
2014年2月24日(月)	助産学課程2年次「Infant Feeding and Nutrition」講義・演習参加
2月25日(火)	成人看護学2年次「持続可能性」講義・演習参加
2月26日(水)	学内見学
2月27日(木)	学内見学
2月28日(金)	遺伝看護研究グループに参加 助産学課程1年次「Health Promotion and Public Health in Midwifery Practice」講義担当
3月2日(日)	不妊専門治療クリニックに勤務する助産師との面談
3月3日(月)	Tiverton Hospital 見学および助産師の家庭訪問同行
3月4日(火)	学内見学
3月5日(水)	Derriford Hospital 見学
3月6日(木)	遺伝看護研究グループに参加
3月7日(金)	Jubilee 助産師チームの家庭訪問に同行
3月8日(土)	英国で実践する日本人男性助産師との面談
3月10日(月)	研修の振り返り

である。

- ① 講義や演習への参加，実習施設訪問を通し，Plymouth Universityにおける助産学教育の強みを理解する。
- ② 英国における助産師の自立性および多職種連携を理解する。
- ③ 生殖年齢にある女性を対象とした，地域の健康活動を理解する。

Plymouth Universityの研修受け入れのアウトカムは，次のような内容であった。

- ① 研修終了後，母乳育児支援に関連した日英の実践の評価について共著の論文投稿をする。

2. Plymouth Universityの講義と演習への参加

1) 助産学課程2年次「授乳支援」の演習参加

助産学の科目である「Infant Feeding and Nutrition」のモジュールの演習に参加した。

各モジュールには大学が作成したモジュールブックが存在し，学生は学内サイトからアクセスが可能である。このモジュールブックには，科目のねらい，実際の講義内容の項目，達成目標，評価方法等が詳細に明記されており，さらには予習文献や関連ウェブサイトのリストも示されている。学生はこれらを確認し，課題学習をふまえたうえで講義・演習に臨むことが求められる。助産学の科目は1年次から3年次それぞれで必修の科目が決まっており，1学年約50名の学生が一緒に講義や演習で学んでいたが，臨床実習は方々の実習施設に少人数で分かれていた。助産学課程では，大学講義と臨地実習が数週間ごと交互に展開されているため，久しぶりにキャンパスで顔を合わせたクラスメイト達は，授業開始前の時間でそれぞれの実習で経験した分娩介助のエピソードに花が咲いていた。

この日は母乳育児支援の実技の演習が行われた。実際に演習に入る前の導入では，これまでに学んだ母乳のメカニズムを生理学や解剖学の視点で復習が行われた。教員の問いかけに学生が次々と反応している様子から，事前学習の徹底ぶりが伺えた。そしてその後続く講義内容への展開がスムーズであった。この点は，日本の大学も見習うべきことではないかと感じた。その後で学生は3つのグループに分かれ，それぞれのテーマで演習が開始された。教員を交え輪になって座って演習することによって，教員はそれぞれの学生に目が届きやすく，また学生

にとっても教員に質問したり指導を受けやすい環境であった。

演習は，「授乳のポジショニング指導」「搾乳指導」といった保健指導の要素の大きい内容で，学生が2人ずつペアを組み，助産師役と対象者役を交互に行った。保健指導であるため，知識をアウトプットすることで確認でき，また実習現場ですぐに活用できる内容であると感じた。助産師役はパンフレットやチェックリスト，乳房モデルを用いながら，対象者である母親自身が自立して技術を習得できるようハンズオフの指導の方法をとっていた。そこで使用するパンフレットはNHSで発行しているものを用いており，学生が実習するNHS Trust (NHSの専門病院) で使用しているものと全く同じものであるため，学習と実践とが統一されている印象を強く受けた。また，対象者役も授乳する母親としての質問や不安などを予測して表出することが求められ，対象者の理解にもつながると感じた。

ユニセフとWHO (世界保健機構) は，母乳育児を中心とした適切な新生児ケアを推進するため，全世界で「赤ちゃんにやさしい病院」イニシアティブを展開し，「母乳育児を成功させるための10か条」を掲げている。日本においてはこれを遵守し実践する約70の施設がBFH (赤ちゃんにやさしい病院) に認定されている。日本では認定をうける対象となるのは産科施設のみであるが，英国では助産師教育機関も認定対象となっておりPlymouth Universityも認定に向けて取り組む施設の一つである。良い教育が良い実践につながるということが意識されている。つまり教育の質と連携が重要視されていることの現れであると感じた。

2) 成人看護学課程の「持続可能性」講義・演習参加

成人看護学課程2年次の看護学生の講義・演習にも参加する機会があった。科目名は「持続可能性」で，環境に視点を置いた看護・健康について考えるきっかけをつくることを目的に展開されていた。具体的には，看護職であれば普段あまり考えずに使用しているディズポーザブル製品をテーマとし，「その製品は絶対に必要か」「その製品をつくるまでに費やした資源と人的労働力はどうか」「このままどんどん使い続けた場合の将来の地球をどう考えるか」という視点で，実際の製品を手に取りながらディス

カッションが行われた。

5名程度の小グループに分けられた学生は、ディズボーズブルの手袋、注射針、プラスチックシリンジ、輸液バッグ等を、必要性や優先度を考えながら順番付けしていくが、最初は「患者の安全」「仕事の効率」の点で必要だとしていた製品も、教員の問いかけによって徐々に「他で代用できるのでは」「絶対必要ではないかも」という考えへとかわっていく様子があった。明らかな答えはないが、長い目で地球のことを考えていくという意識がとても新鮮であった。また、実際の製品を使用しながら、相談し合っただけで考える作業を演習に含めることで、学生の意識に効果的に働きかけていることが伝わった。

3) 助産学課程1年次「Health Promotion and Public Health in Midwifery」での講義

助産学課程1年次の学生が履修する「Health Promotion and Public Health in Midwifery」のモジュールの中の「Political Influences on Health」の時間をもらい、講義を行った。内容は「Health System and Midwifery Education in Japan」をテーマとし、母子保健を中心とした日本のヘルスケアシステムについてと、岩手県立大学の助産学科目プログラムについて紹介した。

ヘルスケアシステムについては、医療保険制度のことをふれ、日本での正常分娩では保険が適応されないこと、ただし出産育児手当金が支給されることを紹介した。英国では分娩も含めて利用者が窓口で支払う医療費負担はゼロであり、この点は大きな違いである。また、国別の合計特殊出生率を示し、日英の数値の変化の違いを共有した。英国の数値の1.96に比べて日本は1.41と少子化問題は深刻で、加えて日本では第一子出産時の女性の平均年齢が30歳台まで上昇したこと、ほとんどの出産が病院で行われること、入院期間が1週間程度であることを説明すると、学生は声を出したりうなずいたりしながら関心を持って聞いていた。続いて、日本の政策「すこやか親子21」に掲げられる母子保健のゴールについても触れ、日本が今どんな方向を目指しているかのイメージとなればと話をした。後半は、岩手県立大学の助産学科目プログラムについて紹介した。英国のダイレクトエントリーとは異なり、日本では助産師も全員が看護師免許を取得する必要があること、そのため看護と助産を平行で学んでいること、助産学に

関しては4年次の1年間に助産の講義と分娩介助などの実習が集中していることの説明をした。

学生達は、講義開始後まもなくから、こちらの話の途中でも挙手をしてどんどん質問をしてきた。この点は、日本と欧米の学生の姿勢の点では大きな違いである。疑問に思ったことは聞く、理解しにくかったことは確認する、という積極的な姿勢があった。そのため、逆に講義をする立場としては、学生がどこまで理解しているか、どこがもっと説明が必要なのか、ということが伝わり、相互作用により効率的な授業をすることが可能になると考える。学生から挙がった質問が数多く、その回答だけでも時間を要した。しかし、質問に対応するというやりとりのおかげで、言葉の壁はありながらもコミュニケーションをはかることができ、距離がぐっと縮まったのを実感した。学生からは、「健康保険は毎月いくら払うのか」「助産学生の分娩介助数は何件か」「日本でも自宅分娩や水中分娩はするのか」「分娩時の疼痛緩和法は」「助産師は処方ができるか」「母乳栄養率はどれくらいか」「若年妊娠は問題になっているか」「助産師の給料は」と、日本の現状に関心を示す質問が飛び交った。そして質問と同時に英国ではどうなのかの現状を教えてくれた。また彼女達のほとんどが社会人を経ての学生で、既婚者や子どものいる女性が多いことには大変驚かされた。

3. 病院施設見学

1) Stand Alone Midwife Led Unit, Tiverton Hospital

Tiverton はPlymouthと同じDevon州に位置し、Plymouthからは車で2時間ほどのところにある小さな町である。Tiverton HospitalのMaternity Unitは、助産師が独立して活動するユニットで、日本でいう院内助産院のような施設である。正常に経過している妊産婦が対象で、異常に傾いた場合はすぐに産科医のいる大きな病院へ紹介されるシステムになっている。また、異常に傾いた場合だけではなく、経過中に産科医とも連携して対象者の健康の管理をしていた。

その日の勤務助産師は3名、シフトあたりの助産師の数は、その日の分娩の状況によって流動的になっているということであった。ユニットにはPlymouth Universityからの実習看護学生がおり、またスタッフ助産師には卒業生がいた。訪問中は進行している分娩がなかったため実際の分娩室に入って見学したが、水中分娩用

プール、産痛緩和の笑気ガスといった、日本ではあまり馴染みのない備品が目があった。次に助産師に同行して、帝王切開後で入院中の褥婦のケア、初回妊婦健診で来院した妊婦へのかかわりを見学した。褥婦の部屋は4人部屋で広々とした印象を受けた。妊婦健診で来院した妊婦への対応も個室で行い、これまでの既往や社会環境を丁寧に問診し、そしてあらゆる質問に対応していた。人生の中で大きなイベントである出産に関わる専門職として、対象者を尊重して信頼関係を築いている様子が感じられた。

英国でも、日本の母子健康手帳にあたる書類があり、妊娠・分娩・産褥（褥婦用・新生児用）と分けられている。初回の妊婦健診で受診したその女性にも、妊娠期用の「Pregnancy Notes」が説明・配布された。それらはNHSで作成された様式で、健診結果等を助産師が記入するが、文書自体は妊婦自身が保管する。それは、緊急に他施設を受診しなくてはならない状況でも、その文書を持参すれば受診先の医療者がそれまでの経過や背景をすぐに把握できるというねらいがある。また、病院で管理する情報は助産師がコンピュータに入力を行っていた。

その後、助産師による2件の家庭訪問に同行した。どちらも産後数日の褥婦の家庭であった。家庭訪問の日時は前もって決められており、褥婦は助産師の訪問を待ち受けていた様子があった。母体のバイタルサインや尿検査といった健康チェックに続き、新生児の体重測定が行われ、同時に母親に授乳に関する問診をしたり質問等に対応したりしていた。対象者の家庭に実際に入り込んでいくため、その居住環境、家族関係等のアセスメントが可能であった。上の子どもの世話と新生児の世話で慌ただしい様子の褥婦には、話のなかでサポート状況を聞くなど、個別性のあるかかわりを行っていた。訪問は30分程度であった。

2) Exeter Hospital

正常妊産婦のみを取り扱うTiverton Hospitalからの搬送先が、Exeter Hospitalである。Tiverton Hospitalからは車で20分の、Devon州の州都Exeterにある大病院である。病院のメインの大きな建物に隣接して「The Centre for Women's Health」の建物が並ぶ。センターでは、周産期や生殖医療の他、女性のがん・糖尿病・心臓病なども対象としている。訪問した周産期病棟には、10の分娩室があり、うち1つは

水中分娩プールが設備されている。すべての分娩室のモニターが監視室から確認可能である。

また、緊急帝王切開分娩に対応するための周産期専門の手術室も病棟内にあった。その他、死産や新生児死亡で子どもを失った母親のための、紫色のインテリアなどで雰囲気が配慮された病室も整えられていた。病棟ではスタッフ達は忙しそうに業務に追われている様子であったが、廊下のかべにスタッフの笑顔の顔写真付き紹介が飾られているなど、工夫も凝らされていた。ちょうどExeter Hospitalで実習中のDoris先生が担当する助産学生に会い、担当教員のDoris先生とのやりとりにも立ち会うことができた。

3) Jubilee 助産師チーム, Derriford Hospital

Plymouth Universityから車で10分ほどに位置するDerriford Hospitalの、Jubilee助産師チームの家庭訪問に同行した。Derriford Hospitalもまた、Plymouth Universityの学生の実習施設でもある。Jubilee助産師チームは経験豊で優れた助産師メンバーで構成され、妊娠期の健康診査から、自宅出産の介助、産褥期のチェックまで、ひと通りのケアを担う。家庭訪問時や分娩介助時に、担当助産師単独で今の状態が正常か異常か、および予測されるリスクのアセスメントをする能力が求められる。そして異常時には、救急医療チームや産科医、産科病棟との連携が必要となる。妊産婦においては、少しの判断の遅れが重大な結果を招きかねない状況と背中合わせである。その点からも、訪問を担当する助産師達には鋭い観察力と迅速な判断力が求められる。同行した訪問先は、妊娠20週の妊婦宅と、帝王切開術後3日目の母子宅であった。どちらの対象者も、担当助産師が上の子の妊娠時にかかわるなど、以前から関係性が形成されており、助産師は家族に親しみを込めて接し、家族は助産師を温かく家の中に迎え入れてお茶を勧めていた。

妊娠20週の妊婦には、助産師による一般的な健康チェックが行われた後、分娩の場所や方法について相談する場面があった。その妊婦が自宅での水中出産を希望していたため、助産師はだいたいどの位置に水中分娩用プールを置くといいか、そのため家具を動かしたほうがいいこと、などの説明をしていた。訪問時に妊婦の夫も在宅しており、夫も含めて説明することによって、実際に分娩に備えた作業や分娩時のサ

ポートがイメージできている様子であった。また妊婦は前回の分娩で多量出血の既往があるが、訪問した助産師が前回の自宅分娩も担当したことから経緯をよく把握しており、今回起こりうるリスクとその対応について、前もって説明が加えられていた。そして、その確認をしたことによって妊婦自身も自覚を持ち、同時にリスクを事前に共有できたことで安心しているように見えた。このような継続したかかわりのケースの場合は、より信頼関係の構築や情報共有が容易であると感じた。

帝王切開術後3日目の褥婦の家庭訪問では、母子の健康チェックが行われた。褥婦は前日悪露が大量に排泄され、容器にとっておいた凝血を見せながらそれが異常かどうかの質問をしていた。日本と比較すればかなり早期に自宅に戻っている産後の母子には、予測できる異常やその対応などをしっかり教育することの重要性を実感した。またその女性は退院時には尿意がはっきりせず自己導尿を行っていたため、そのアセスメントも行っていた。その後は会話の自然な流れから、分娩のレビューをしている様子があった。女性は初産婦で、緊急帝王切開となったケースであり、大変な思いをしたけれども無事に出産できてよかったと笑顔で話をしていった。自分が思うような分娩にならずにわだかまりが残るケースも多いが、このように自宅に帰ってからゆったりとレビューする機会があるのは、褥婦の肯定的な受け止めを促進しているのではないかと考えた。

おわりに

15日間の研修で、Plymouth Universityの学内外、多くの場面で学ぶ機会に恵まれた。

学内では、看護学と助産学の講義と演習に参加し、また教員や学生との実際の交流のなかから、学生が積極的に講義・演習に臨めるような支援、臨地で実際に活用できるスキルを主体とした内容の工夫、学生自身が考えるきっかけづくり、といった点を理解することができた。また、講義や演習の後、教員は短時間でも必ず教員同士で振り返りを行っていた。その演習の目標に照らし合わせて達成された点、改善が必要な点、学生の様子などが共有されていた。教育の基盤には、学生だけではなく教員にも十分な知識と技術、そして準備と計画が必要であることも感じられた。

学外では、臨床施設の訪問や助産師の家庭訪問同行から、助産師と医師など施設内におけるチームの連携、搬送元・搬送先の施設間の連携、地域と助産師の連携、を感じることもできた。地域で活躍する助産師の、病院や救急との連携については本文でも触れたが、家庭に入っていく専門職として、その家族背景によってはソーシャルワーカーとの連携が必要になるという話もあった。かかわる家族を中心とし、他職種をつなぐという役割も助産師は担っていることを学んだ。さらに、大学教員であるDoris先生も、講義や実習という場面だけではなく、ひとりの助産学教員/助産師スーパーバイザーとして、いろいろなつながりを持ち、助産師としての使命を持って活躍する姿を見習いたいと感じる場面がいくつもあった。

今回の研修ではPlymouth UniversityにColleagueとして受け入れられ、Doris先生のコーディネイトで単なる視察にとどまらない多くの経験ができたことは、これまでに築かれた大学間の関係性が土台となっていることを実感した。研修を通して、日英の看護学・助産学教育や助産実践の違いを知ったことはもちろん、英国の助産師の多様な実践の場が強く印象に残った。今後は、このような学びをもとに大学間の共同研究の発展につなげ、交流を継続させていきたい。

謝 辞

本研修の全期間においてコーディネイトをいただいたPlymouth University助産学課程准教授/助産師スーパーバイザーのDoris先生に深く感謝いたします。また、研修の機会をくださいました武田学部長、サポート頂いた母性看護学・助産学教育研究分野の皆様、共通教育センターのダガン先生、および看護学部の皆様から心より感謝申し上げます。

参考資料・文献

- 1) Takashi Yoda, Kenzo Takahashi, et al: Japanese Trends in Breastfeeding Rate in Baby-friendly Hospitals Between 2007 and 2010 - A Retrospective Hospital-based Surveillance Study, BMC Pregnancy and Childbirth, 13(207), 2013.
- 2) 日本母乳の会ホームページBFH, <http://>

- www.bonyu.or.jp/index.asp?patten_cd=12&page_no=11 (平成26年10月5日検索)
- 3) 宮本千津子, 田中克子他: 英国(U.K.)における看護学教育について - イングランドとスコットランドの基礎教育および卒後教育を視察して -, 岐阜県立看護大学紀要, 3(1), 109-115, 2003.
 - 4) 曾根志穂, 高井純子他: イギリスにおける看護師の教育制度の変遷と看護職の現状, 石川看護雑誌, 3(1), 2005.
 - 5) School of Nursing and Midwifery - Plymouth University, <http://www5.plymouth.ac.uk/schools/school-of-nursing-and-midwifery> (平成26年10月5日検索)
 - 6) Tiverton and District Hospital- Northern Devon Healthcare NHS Trust NDHT, <http://www.northdevonhealth.nhs.uk/services/community/tiverton/>, (平成26年2月17日検索)
 - 7) Plymouth Hospitals NHS Trust - Maternity Service, <http://www.plymouthhospitals.nhs.uk/ourservices/clinicaldepartments/maternity/Pages/Home.aspx>, (平成26年2月17日検索)
 - 8) Royal Devon and Exeter NHS - Centre for Women's Health, http://www.rdehospital.nhs.uk/patients/services/child_health/ (平成26年10月5日検索)